

V. 評価と計画の見直し

手厚い支援を必要としている子どもの評価と計画の見直し

評価とは、事実を明らかにすることと、その事実の価値判断をすることです。学校で行われるすべての教育活動は、計画、実施、評価、改善という一連の過程の中で運営されています。この教育活動の評価は、教育活動の結果を説明する（説明責任）の意味合いもありますが、計画を見直すための材料を提供することが重視されます。

手厚い支援が必要な子どもの評価では、子どもや保護者、関係機関の方々などが、評価のプロセスに参加することが重視されます。それは、評価に参加することで、子どもや保護者、関係機関の方々に影響を及ぼすこと、評価結果を活用することが促されるためです。ただし、手厚い支援が必要な子どもが評価そのものに参加することは難しいことが多いため、その子どもにとっての学びや生活の文脈での意味を推し量っていく必要があります。そこで、事実を関係者間で確認し、子どもにとってよりよい価値を構築していくことが重視されます。

1 評価と計画の見直し

(1) 評価にあたって

評価は、事実を測ったものを示すことと、それに基づいて価値判断することを合わせたものです。評価を行う際の設定された目標と内容は仮説です。この仮説が正しかったのかについて、評価と改善のサイクルを進め、形成的評価や総括的評価を行い、仮説の検証をしていくことが、求められます。また、評価にあたっては、本人、保護者及び専門家の参加が重視されます。これは評価への参加によって教育活動に積極的に関与することが期待されているからです。

手厚い支援が必要な子どもの評価では、次のことを重視していく必要があります。

・目標に照らして、子どもがその目標を達成できたか、予想外の行動、小さな変化や気付いたことなどを評価し、共有する。

・客観的なデータをとり、その意味付けについて検討する。

・その子なりの楽しみ方や価値観の変化などについて、協議しながら評価する。

* 形成的評価：指導の成果を確かめるために行う評価

* 総括的評価：指導の成果としての達成や向上の状況を学期末や学年末の時点で総括する評価

(2) 計画の見直しにあたっての留意点

学校で行われるすべての教育活動は、計画、実施、評価、改善という一連の過程で運営されます。この一連のサイクルの中で、子どもの評価ばかりでなく、子どもをとりまく環境を評価し、見直していく視点が必要となります。

評価を行った結果を指導の改善につなげていくこととなります。評価結果を個別の指導計画や個別の教育支援計画に反映させていく必要があります。指導の改善は、個々の指導の改善だけではなく、教育課程の改善にも役立てていくことが期待されます。

2 ぱれっとで紹介する評価と計画の見直しの視点

ぱれっとでは、目標をどのように立てていくのかを重視してきました。この目標との関連から評価と計画の見直しについて要点を整理すると以下ようになります。

「1. 目標達成が難しい際の振り返りの視点」では、目標の達成ができなかった場合、手立てを見直す。手立てに問題がない場合は評価を見直す。評価に問題がない場合は、実態把握自体を見直していくことが必要であることを記しています。

「2. 個別の指導計画の見直し」では、個別の指導計画では、実態把握、ねらい、手立て、評価の一連の流れ自体を見直ししながら、その子にとっての学びにつながっているのか、その

構造を見直すことについて記しています。

「3. 個別の教育支援計画の見直し」では、学校における学習活動と家庭生活、地域生活、関係機関との連携の観点、子どもの生活の文脈から見直すことについて記します。今後の生活につながるよう、本人・保護者や関係機関と協議し、見直すことについて記しています。

もっと知りたい人はこちら

1. 特別支援学校学習指導要領解説
2. 源由里子(2008)参加型評価の理論と実践 三好皓一編 評価論を学ぶ人のために 世界思想社
3. 龍慶昭 佐々木亮著(2004)「政策評価」の理論と技法 多賀出版
4. 長尾眞文(2003)実用重視評価の理論と課題 日本評価研究第3巻第2号 日本評価学会
5. 梶原叡一、加藤明監修(2010)改訂「実践教育評価事典」、文溪社

V. 評価と計画の見直し

1. 目標達成が難しい際の振り返りの視点

こんなことはありませんか？

中学2年生のショウさんは、朝の会で、スイッチを押し、自分の好きな曲が流れるのを楽しんでいます。

そこで、担任の先生は、「自分で好きな曲を選ぶ」という目標を立てました。この目標を達成させるための手立てとして、複数のスイッチを用意し、それぞれ異なる曲がながれるような工夫をしました。

しかし、曲が流れると笑顔になるものの、その曲が流れるスイッチに手を伸ばすことはありません。

朝の会では、先生がショウさんの手を持って、スイッチを押すようにしました。

自分からスイッチに手を伸ばす様子は、なかなか見られませんでした。

ショウさんの次の目標や手立てをどのように設定すればよいか、先生は困っています。



ここがポイント！

目標の達成ができなかった場合、手立て、評価、実態把握自体を見直し、目標の見直しにつなげていくことが大切です。

このように考えてみましょう

ショウさんは、自分の好きな曲が流れると笑顔になることから、この曲を楽しんでいることがわかります。そこで、担任の先生は、「自分で好きな曲を選ぶ」という目標を立て、複数のスイッチとそれぞれ異なる曲が流れるような工夫をしました。しかし、自発的にスイッチに手を伸ばすことはありません。このケースでは、目標と手立ては関連していますが、結果が伴いませんでした。そこで、担任の先生は、先生がショウさんの手を持ってスイッチを押すというような手立ての変更を行うことにします。こうなると目標と手立ては、関連が無くなってしまいます。このように目標と手立てがばらばらになってしまつては、そもそも、この教育活動が何のために行われたのかがわからなくなってしまいます。

まずは、目標自体を見直してみましよう。確かに「自分で好きな曲を選ぶ」というのは、ショウさんの生活を大きく変化させるよい目標です。では、実態把握を見直してみましよう。そもそもショウさんは、曲が流れることと自分が手を動かすことの因果関係を理解して、スイッチを押していたのでしょうか。その点を把握する必要があり、個別の指導計画には、楽しい時に手を動かすことがあると書かれていました。そこで、担任の先生は、手を動かすことと変化が生じることを結びつける指導が必要だと考え、別の指導場面で、箱を倒すと鈴が鳴る教材をつくりました。ショウさんが手を動かすと箱が倒れて鈴が鳴り、ショウさんは笑顔になります。何度も手を動かして箱を倒そうとするようになりました。このような実践の後、新たに設定した「音楽を流そうと手を動かしてしっかりとボタンを押す」という目標が達成されることになりました。

具体的な実践に向けて 使えるツール ポイント

目的と手立ての関係に注意し、目標と手立ての関係に問題がない時は、目標、実態把握を見直していくことが大事です。

これまでの指導の経過が、指導の記録や個別の指導計画等に記載されていますので、これを参考に、子どもの様子をよく見ていくことも必要です。

これを実践してみたら・・・

ショウさんは、手を動かし、箱を倒すことで変化が生じることを実感できたことから、音楽を流すためにスイッチを押そうとすることが増えてきました。

朝の会では、クラスメートの声や先生の声掛けで、手を動かしてしまうことがあることから、しっかり押すと曲が流れるように工夫しました。また、ショウさんがボタンを押すまで、先生は声掛けしないようにしました。

そうすると、力を入れてスイッチを押す様子が見られるようになり、曲が流れると笑顔になる様子が見られるようになりました。

もっと知りたい人はこちら

1. 全国肢体不自由教育校長会編(2011)障害の重い子どもの指導 Q&A 自立活動を主とする教育課程、ジアース教育新社
2. 全国心身障害児福祉財団(2010)肢体不自由教育ハンドブック、全国心身障害児福祉財団

V. 評価と計画の見直し

2. 個別の指導計画の見直し

こんなことはありませんか？

ケンタさんは、中学2年生です。校外学習で、大好きな電車に乗って、目的地に向かう時のことです。見慣れない電車を見つけたケンタさんは、一人でその電車のそばに行っていました。ケンタさんの姿が見えなくなって、先生方はあわてて探しにいきました。そんなことがあったので、どこかに行く際には、担任の先生に伝えてから動くような指導が必要と考えました。これまでも、ケンタさんは、ほしいものを身近な人に要求できるように、カードを渡して要求を伝えるような指導を行ってきました。

そこで、ケンタさんが移動する際には、カードを渡してから行くような指導を行うこととしました。ケンタさんは移動する際に、カードを渡してから移動するようになりました。

学期末の個別の指導計画の見直しの際に、先生は、ケンタさんの困った行動にどう対応するかという目標や手だてが多いことに気づきました。

そして、ケンタさんにとっての学びにつながる目標や学習内容の設定の必要を感じました。



ここがポイント！

個別の指導計画では、実態把握、ねらい、手立て、評価の一連の流れ自体を見直しながら、その子にとっての学びにつながっているのか、その構造を見直すことが大切です。

このように考えてみましょう

ケンタさんは、コミュニケーション上の課題があることから、個別の指導計画において、要求を相手に正確に伝えることを目指し、カードを渡して要求を伝えるような指導を行ってきました。

この指導と生活の中での危険を回避するため、相手に伝えてから移動するという指導を結びつけることができたケースです。重要な指導であり、この指導を行う意義は大きいと言えます。

ただし、困っている課題に対応するだけの指導では、十分ではないでしょう。

ケンタさんにとっての学びという視点で実態を見直してみましょう。

先生は、ケンタさんが、見慣れない電車を見つけて、その場所に行ったということにも注目しました。そして、興味を持ったことから学びを広げたいと考えました。

ケンタさんが自発的に行った行動を手掛かりに、見慣れない電車がどんな電車だったのかを描いてみたり、インターネットで調べてみたり、写真の中からその電車を探してみたりすることも指導として展開できるでしょう。

また、ケンタさんが「はっ」とした思いを誰かに伝えることも指導の内容として考えられます。

その子なりの価値観やその子なりの伝達の仕方等も考慮に入れて、教科の内容や自立活動の内容とも関連付けて指導に生かしていく必要があり、その観点から個別の指導計画を見直していくことが必要となります。

具体的な実践に向けて 使えるツール ポイント

子どもの興味関心を手掛かりにしながら、実態把握のためのシート、指導計画、個別の教育支援計画などを関連付けながら個別の指導計画へ反映させていく必要があります。

そして、その子にとっての学びにつながっているかを評価し、指導につなげていく必要があります。

これを実践してみたら・・・

個別の指導計画を見直した結果、ケンタさんが興味をもっている電車を題材に色や形、名前などの概念を整理するような学習目標と内容が加わりました。

ケンタさんは、気に入った電車の絵を描くようになり、その絵を見ながら色や型を自分からつぶやくようになり、担任の先生がケンタさんの描いた絵を指さしながらことばを繰り返すようにしました。

好きな電車の絵を描いた後に、指さしたり、担任の先生の方を見ながら電車の名前を言う場面が見られるようになってきました。

もっと知りたい人はこちら

1. 全国肢体不自由教育校長会編(2011)障害の重い子どもの指導 Q&A 自立活動を主とする教育課程、ジアース教育新社
2. 全国心身障害児福祉財団(2010)肢体不自由教育ハンドブック、全国心身障害児福祉財団

V. 評価と計画の見直し

3. 個別の教育支援計画の見直し

こんなことはありませんか？

ケンタさんは、高校2年生です。

電車での移動が好きなことから、校外学習等での移動では、電車での移動を取り入れています。

一方、おうちの都合で、登下校時には、地域生活支援事業の移動支援を活用し、車での移動をしています。

担任の先生は、将来の生活や現在の生活の充実を考え、下校時の送り迎えを電車で行うことにしたいと提案しました。

保護者や関係機関の方々と話合いましたが、それぞれの意見がかみ合わずに実現しない状況が続いています。



ここがポイント！

学校における学習活動と家庭生活、地域生活、関係機関との連携の観点からその子にとって充実した生活が展開できるように見直す。

このように考えてみましょう

このようなケースで、保護者の方が、子どもさんの状況から、周囲の方々に迷惑をかけてはいけないと考えてしまうことがあります。交通機関でのルールを守ることを毎日の生活の中に組み入れていくことが本人のためであることはわかっているにもかかわらず踏み出せないことがあるのです。

そのような時には、将来や現在の本人にとってよいことをするために、こうあったらいいなという目標を共有することから始めます。

そして、その実現に向けた道筋をみんなで考えていくことが必要でしょう。例えば、今回のようなケースでは、まず学校の校外学習等の学習の場面を利用して、駅までの移動や電車内のルールを明確にし、そのルールに沿って乗車ができるような指導を繰り返し行い、支援のポイントとなる点を整理します。

その支援のポイントを地域生活支援事業の移動支援を行う方と共有し、休日等を使って練習を行います。練習から見出された課題を整理し、学校で取り組めることも整理します。

繰り返し、練習する中で、時期を見計らって、下校時に電車での移動を行うようにします。保護者の方が一緒に移動したりするなどして、課題を整理し、学習活動にも結び付けていくような工夫も必要でしょう。

このように子どもの学習面での変化や生活面での変化を評価し、今後の生活がより充実するように、本人・保護者や関係機関と協議して、個別の教育支援計画を見直すことにつなげていくことが大切です。

具体的な実践に向けて 使えるツール ポイント

その子の指導の状況などを評価するため、個別の指導計画を見ながら、保護者や関係機関の方々と協議し、その子にとって、よりよい生活に向けた協力を行い、個別の教育支援計画を見直すことが大切です。

これを実践してみたら・・・

ケンタさんは、電車でのルールを守りながら移動することが楽しめるようになりました。地域生活支援事業の移動支援を行う方と一緒に登下校することもできるようになりました。休日には、電車に乗って移動し、外食を楽しむこともできるようになりました。

また、次第に長い時間ルールを守れるようになったことから、保護者の方と旅行に行く機会も増えてきました。

もっと知りたい人はこちら

1. 全国肢体不自由教育校長会編(2011)障害の重い子どもの指導 Q&A 自立活動を主とする教育課程、ジアース教育新社
2. 全国心身障害児福祉財団(2010)肢体不自由教育ハンドブック、全国心身障害児福祉財団